主日礼拝説教「古いものではなく…」

日本基督教団石神井教会 2019年2月3日

【旧約聖書日課】エレミヤ書 13章1~11節

1主はわたしにこう言われる。「麻の帯を買い、それを腰に締めよ。水で洗ってはならない。」

2わたしは主の言葉に従って、帯を買い、腰に締めた。

3主の言葉が再びわたしに臨んだ。4「あなたが買って腰に締めたあの帯をはずし、立ってユーフラテスに行き、そこで帯を岩の裂け目に隠しなさい。」5そこで、わたしは主が命じられたように、ユーフラテスに行き、帯を隠した。6多くの月日がたった後、主はわたしに言われた。「立って、ユーフラテスに行き、かつて隠しておくように命じたあの帯を取り出しなさい。」7わたしはユーフラテスに行き、隠しておいた帯を探し出した。見よ、帯は腐り、全く役に立たなくなっていた。

*主の言葉がわたしに臨んだ。9主はこう言われる。「このように、わたしはユダの傲慢とエルサレムの甚だしい傲慢を砕く。10この悪い民はわたしの言葉に聞き従うことを拒み、かたくなな心のままにふるまっている。また、彼らは他の神々に従って歩み、それに仕え、それにひれ伏している。彼らは全く役に立たないこの帯のようになった。11人が帯を腰にしっかり着けるように、わたしはイスラエルのすべての家とユダのすべての家をわたしの身にしっかりと着け、わたしの民とし、名声、栄誉、威光を示すものにしよう、と思った。しかし、彼らは聞き従わなかった」と主は言われる。

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙一 2章1~5節

1兄弟たち、わたしもそちらに行ったとき、神の秘められた計画を宣べ伝えるのに優れた言葉や知恵を用いませんでした。2なぜなら、わたしはあなたがたの間で、イエス・キリスト、それも十字架につけられたキリスト以外、何も知るまいと心に決めていたからです。3そちらに行ったとき、わたしは衰弱していて、恐れに取りつかれ、ひどく不安でした。4わたしの言葉もわたしの宣教も、知恵にあふれた言葉によらず、"霊"と力の証明によるものでした。5それは、あなたがたが人の知恵によってではなく、神の力によって信じるようになるためでした。

【福音書日課】ルカによる福音書 5章33~39節

33人々はイエスに言った。「ヨハネの弟子たちは度々断食し、祈りをし、ファリサイ派の弟子たちも同じようにしています。しかし、あなたの弟子たちは飲んだり食べたりしています。」34そこで、イエスは言われた。「花婿が一緒にいるのに、婚礼の客に断食させることがあなたがたにできようか。35しかし、花婿が奪い取られる時が来る。その時には、彼らは断食することになる。」36そして、イエスはたとえを話された。「だれも、新しい服から布切れを破り取って、古い服に継ぎを当てたりはしない。そんなことをすれば、新しい服も破れるし、新しい服から取った継ぎ切れも古いものには合わないだろう。37また、だれも、新しいぶどう酒を古い革袋に入れたりはしない。そんなことをすれば、新しいぶどう酒は革袋を破って流れ出し、革袋もだめになる。38新しいぶどう酒は、新しい革袋に入れればならない。39また、古いぶどう酒を飲めば、だれも新しいものを欲しがらない。『古いものの方がよい』と言うのである。」

教会は「飲んだり食べたり」

先週、小さな記事でしたが、全国チェーンのコンビニエンスストアが「こども 食堂」を始めるというニュースが報じられていました。 教会にも「こども食堂」 は、元々は家庭で十分に食事を摂ることができない子どもたちのための福祉活動 として広がってきましたが、最近では、地域で子どもたちを中心に人が集まるコ ミュニティの場として多様な人を受け入れるようになっているようです。コンビ ニエンスストアの始めるという「こども食堂」も、そのような場を提供するとい う目的があるようです。「食べたり飲んだり」する営みの場の意義が、見直され るようになっているということなのでしょう。

教会は、昔から「食べたり飲んだり」する場として営まれてきました。今日の使徒書日課(コリントの信徒への手紙一)を記した使徒パウロも、この手紙の中で、教会の集まりのことを当たり前のように「食事のために集まるとき」(Iコリ 11:33)と呼んだりしています。もっとも、パウロは、教会でなされる飲食のあり方について、どちらかというと厳しく戒めている場合が多いのです。別の手紙で「神の国は、飲み食いではなく」(ロマ 14:17)と記しているところがあることを思い出される方もあるでしょう。パウロの関わった教会では、飲食のことでトラブルになることが少なくなかったのでしょう。パウロ自身は、トラブルになるくらいならば自分は「肉も食べなければ、ぶどう酒も飲ま(ない)」(ロマ 14:21)とさえ宣言しています。とは言え、パウロは、教会の営みの中で飲食を共にすることを禁じることも、制限することも、しませんでした。むしろ、それを、よい形で整えたいと願ったのです。それは、もちろん、「飲んだり食べたり」することは、弟子たちの教会を生み出してくださった主イエスがお始めくださった、特別な意味のあることだったからです。

福音書日課(ルカ 5 章)は、「人々」が主イエスや弟子たちの「飲んだり食べたり」を批難する言葉から始まっています。洗礼者ヨハネの弟子たちやファリサイ派の弟子たちは、定期的に断食をし、祈るときを持っていました。主イエスと弟子たちは、まるで断食と祈りの代わりのように連日、飲んだり食べたりの宴会を重ねていたのです。主イエスに対する批判は「見ろ、大食漢で大酒飲みだ」(ルカ 7:34)というものだったと、主イエスご自身がお語りになられています。

とは言え、この場面に登場する「人々」も、実は主イエスの招かれた宴会の席に同席していたのです。主イエスの十二弟子の一人となった徴税人のレビが催した宴会です。そこには、主イエス一行や徴税人の仲間たち、その他大勢の人々が招かれていました(同 29 節)。その中にいたファリサイ派の人々や律法学者たちこそが、主イエスを批難する言葉を発した「人々」です。おそらく、招かれて来てみたら、普段食卓を共にすることがないような人々、「徴税人や罪人」(同 30 節)がいたので、驚いてしまったのでしょう。

けれども、本当に驚くべきことは、この主イエスのために催された宴会に、「徴税人や罪人」と呼ばれていた人たちばかりでなく、この「人々」も共に招かれていたことかもしれません。主イエスの宴会には、何の分け隔てもないのです。

「新しいぶどう酒」は好きですか?

もちろん、主イエスは、「断食や祈り」を否定されたのでもないし、禁じられたわけでもありません。マタイ福音書の伝える「山上の説教」の中で、主イエスは、断食について、祈りについて、それがどう為されるべきかお教えになられています(マタイ 6 章)。弟子たちの教会も、断食と祈りの習慣を整えたので、今日に至る教会にも礼拝や祈りの会の営みが受け継がれてきたのです。

教会にとって、礼拝や祈りは、取り替えようのない不可欠な営みです。それに 比べれば、「飲んだり食べたり」は絶対的なものとは思えません。教会によって は、一切の飲食をしないというところだって無いわけではないのです。ただ厳格 に礼拝と祈りに集中するために、他の事柄はできるだけ夾雑物として取り除こう とされているのでしょう。パウロが手紙を書き送った教会のように、飲食の営み のゆえにトラブルが生じるというようなことを経験した教会ならば、そのような 方向に向かうのも致し方ないかもしれません。自分に厳しいパウロに倣えば、そ ういうことになるでしょう。

けれども、主イエスは、パウロよりもずっとおおらかでした。神への信頼が、 桁違いでした。「罪人を招いて悔い改めさせる」(32 節)ことができる、とおっ しゃられるのです。

わたしたちは、礼拝の初めにいつも「詩編 51 編」の言葉によって罪の告白をしています。「悔い改めの祈り」をし、悔い改めた者として神の御前に進み出ようとしているのです。慣れた皆さんは、あの「交読文」を目をつぶっていても唱えることがおできかもしれません。そうすると、皆さんは、この礼拝に、罪を告白して悔い改めた、清い心の信仰篤い者としてあずかってくださっている、ということになるのでしょうか。もちろん、そうです。皆さんは、礼拝にあずかり、神の御前に心開くことを通して、神の聖霊によって清められた器になっているはずでしょう。ところで、皆さんのあの「詩編 51 編」の交読による罪の告白は、どれほど真実のものなのでしょうか。皆さんは本当にまったく悔い改めた者として、神の御前に進み出てこられたと、言えるのでしょうか。

敢えてここで、皆さんの罪の告白が真実かどうか、悔い改めがまったきものかどうか、これ以上問うことはやめましょう。それは、断食に関わる問題だからです。祈りの問題だからです。

主イエスは、そのことを問う前に、おっしゃられるのです、「わたしのもとに来なさい。わたしのために催された食事の席に、あなたも招かれている」と。

これは、「新しいぶどう酒」なのです。まだ熟成していない、発酵中の、ブクブクとガスが出続けているような、「新しいぶどう酒」。けれども、この「新しいぶどう酒」が、ときと共に熟成するのです。発酵が終わり、味わいが整い、「良いぶどう酒」にまでいずれ育つはずです。けれども、まだ「新しいぶどう酒」なのです。そこから始まる、はじまりの入口。

主イエスが、断食よりも、祈りよりも、食事の席を優先されたのは、この「新 しいぶどう酒」をご存じだったからでしょう。

「新しい革袋」

皆さんの中に、「飲む」習慣のある方もいらっしゃるでしょう。習慣とまではいかなくても、そういう席であれば召しあがるという方は、少なくないと思います。もちろん、一切召し上がらない方もあると思いますし、それが信仰上のお考えであれば、そのような習慣を大切にしてくださったらよいと思います。飲むにしても、飲まないにしても、「神に感謝して」(ロマ 14:6)そうするのだと、パウロも教えています。飲まない者にはピンとこないところがありますが、主イエスは何と言っても「大酒飲み」でしたから、良い酒のことをご存じだったのでしょう。「古いぶどう酒を飲めば、だれも新しいものを欲しがらない。『古いものの方がよい』と言うのである」。どうも、そういうことのようです。

「古いものの方がよい」というのは、何もぶどう酒ばかりではないかもしれません。新しいものが良い場合もありますが、古いものの方が手に馴染んでいてよいものもあります。「古いもの」には、熟成した良さ、もう変化しない安心感があるということが、少なくないのです。

もちろん、このとき主イエスは、「古いものの方がよい」と言って、年代物の ぶどう酒を出させたわけではありません。「新しいぶどう酒」を招かれたのです。 ご自分のために弟子のレビが催してくれた宴会に、「新しいぶどう酒」を招かれ たのです。まだ、どのように熟成するか、どのように成長するか、どのような味 わいになるか、まったく分からない「新しいぶどう酒」を、ご自分のもとに招かれました。その席は、断食の場でも祈りの場でもなく、宴会の席、食事の席でなければならなかった。「飲んだり、食べたり」する席こそが、「新しいぶどう酒」を迎えるのにふさわしい場なのだと、主イエスはお考えになられたのです。

それは、主イエスのなさったことです。主イエスが、神の御心として行ってくださったことです。神が天上で天使たちに大宴会を催させているだろう、その宴会を、主イエスは、ご自分に従った弟子たちと共に催されたのです。

わたしたちは、主がなされたことの意味を、その大切な柱を、見失うこともあるかもしれません。パウロに叱責されるようなことを、教会でも、食事の準備のときに、食卓を囲むときに、どれだけ重ねてきたことかと思います。「古いもの」ばかりの楽しみにしてしまったことがありました。「新しいもの」に心を向けようともしなかったことがありました。けれども、そうだとしても、わたしたたちは、主イエスがなされたこと、「飲んだり食べたり」を断念することはないでしょう。いずれにしろ、飲んだり食べたりしなければいけないのです。

「新しいぶどう酒は、新しい革袋に入れねばならない」のならば、わたしたちが、「古い革袋」から「新しい革袋」に変えられれば良いのです。いいえ、まず主イエスが「新しいぶどう酒」として、わたしたちの「古い革袋」を打ち破ってくださったのです。もう、「古い革袋」を繕っても、「新しいぶどう酒」も「古いぶどう酒」も漏れ出てしまうでしょう。「新しい革袋」になるしかないのです。いいえ、「新しい革袋」に変えていただけるのです。それを、主が望んでくださっているからです。それが、神の御心だからです。